

要介護高齢者家族の在宅介護プロセスに影響を及ぼす要因 —家族内ニーズの競合を増大させる条件と家族の競合マネジメント—

北 素子*

Factors Influencing the Process of the Family's Caregiving for
a Frail Elderly Person at Home : Conditions Related to the
Competition Between the Needs of the Family Members and the
Family's Strategies of Competition Management

Motoko Kita, RN, PhD.

Department of Healthcare, School of Nursing,
Tokyo Healthcare University

The findings reported in this paper represent part of a larger study on the process of family care provision for frail elderly people using the grounded theory approach. These results aim to explain the conditions that influence the competition between the needs of the family members, which is observed to be a core phenomenon in a family's caregiving process, and the strategies that the family members implement in order to avoid this competition.

Sample data pertaining to twelve families who had been caring for or preparing to care for a frail elderly relative at home were collected from two general hospitals located in Tokyo, Japan, from July 1999 to July 2000. The data were collected through interviews and observations on a continuous basis and were analyzed using comparative analysis methods.

The degree of the competition between the needs of the family members who cared for the elderly member varied according to the strength of "the feeling that motivates the provision of home care" experienced by the member in a burden situation. Moreover, the strength of "the feeling that motivates members to provide home care" was influenced by five "situational conditions" and "the degree of intimacy shared with the elderly member." Furthermore, the family avoided an increase in the competition between the needs of its members by implementing some management strategies according to the degree of competition between the needs.

These findings suggest that it is important for health care providers to recognize the power of the family in controlling the competition between the needs of the family members and supporting this power. The conditions that influence the competition might help in identifying the suitable support level to be provided to the family.

* 東京医療保健大学医療保健学部看護学科

キーワード

高齢者 elderly people

家族システム family system

家族介護 family care-giving

グラウンデッド・セオリー法 grounded theory approach

I. はじめに

先に筆者は要介護高齢者家族の在宅介護プロセスを主テーマとして探求し，在宅介護の〈しわ寄せ〉^{注1)}（在宅介護の要請に伴い成員が行ってきた従来の活動・相互作用が制限される状況）により、成員間に生じるニーズの競合をその中心的な現象として見いだした。先行論文¹⁾では、在宅介護プロセスの全体的概要を、ニーズの競合の状態像に焦点を当てて報告した。しかし、この研究では、家族内ニーズの競合プロセスを左右する条件と家族がどのように競合プロセスを管理しているのかを捉えることもできた。ここではこの点について論じたい。

要介護状態となった高齢者の在宅介護は成員間に軋轢を生じさせる場合も多く、その軋轢が介護者の負担感^{2, 3)}や介護に対する満足感や生き甲斐感^{4~8)}、ひいては在宅介護の質⁹⁾に大きく影響を与えることが明らかとなっている。しかしながら、これまで高齢者の家族介護について積み重ねられてきた多くの知見のなかで、介護にまつわる家族の軋轢を回避するような支援の指針を示す研究は少ない。成員間の葛藤が、高齢者介護と同時に家族が遭遇している発達的・状況的課題と介護者の介護負担感により強められると報告するものや¹⁰⁾、高齢者に認知症がある場合に家族関係に歪みが生じやすく、同居家族内からの介護援助がある場合、介護者自身がアイデンティティを維持して高齢者と関わっている場合、高齢者との別居空間がある場合には、家族関係が安定して維持されるという報告¹¹⁾はあるものの、在宅介護に関連して生じる家族成員間の問題に対し、より掘り下げた検討は加えられていない。

成員間に生じる軋轢や葛藤は、きわめて私的な領域であり、外部支援者が接近するのは難しい。しかし、その軋轢や葛藤が引き起こされる条件や、家族がそれを回避す

注1) 以下では、カテゴリー・レベルの高い順に〈 〉、[]、【 】又は《 》、‘ ’の順で示す。

るために用いる方略を示せれば、家族支援の手がかりとなるものと考える。筆者が行った研究では、成員間の葛藤や軋轢が、在宅介護の〈しわ寄せ〉によって成員間に生じるニーズの競合を契機として生起することを明らかにした。そこで本論では、より具体的な家族支援の方向性を検討するために、家族内ニーズの競合の大きさに影響する条件と、家族が競合の大きさをコントロールするマネジメント方略に焦点を絞り論じることとした。

II. 研究方法

1. 用語の定義

先の研究¹⁾のデータ分析から導きだされ、本論の前提となった主要カテゴリーの定義は以下の通りである。

- 1) 在宅介護の〈しわ寄せ〉状況とは、在宅介護の要請に伴い、家族成員が行ってきた従来の活動や相互作用が制限される状況をいう。
- 2) 〈家族内ニーズの競合〉とは、在宅介護の〈しわ寄せ〉により、要介護状態となつた高齢者、〈しわ寄せ〉状況下の成員、〈しわ寄せ〉の波及する可能性のある成員のニーズがぶつかり、優先度が競い合われる状態をいい、その大きさは当該成員のしわ寄せに対する苦痛、高齢者の介護に関連した事柄から生じる成員間の葛藤、家族役割分担の流動性という3属性の程度によって特徴づけられる。
- 3) 〈家族内ニーズの調和〉とは、高齢者を含む成員それぞれのニーズが互いに脅かし合うことなく適度に満たされた状態を言い、苦痛を伴わない介護の受け入れ、成員の協調的共生、家族役割分担の定着化に特徴づけられる。

2. データ収集期間

1998年11月25日～2000年7月26日。

3. 参加家族と情報提供者

要介護高齢者は60歳以上で、加齢にともなう身体上の変化あるいは疾患により、日常生活上他者からの手助けや配慮を必要とする者とした。家族とは要介護高齢者本人を中心とし、その在宅介護に関連して何らかの行為もしくは相互作用に関わり、かつ血縁関係あるいは婚姻関係にある人々全体を指すこととした。

参加家族は東京都内に所在する2総合病院から紹介を受けた合計12家族であった。情報提供者は、参加家族の中で、家族全体の状況が見渡せていると思われる成員1名以上とした。表1に研究参加家族の概要を示す。

4. データ収集とデータ分析方法

データ収集と分析は、Strauss & Corbin版¹²⁾、および木下の提示する修正Strauss & Glaser版¹³⁾ グラウンデッド・セオリー法によった。

12家族各々に対し、高齢者が入院中は病院を、在宅療養中は高齢者の自宅を1～2ヶ月に1回の割合で継続的に訪問し、情報提供者への面接と在宅介護状況の参加観察を複数回行った。12家族に行った面接と参加観察の回数は、合計68回だった。面接内容は情報提供者から承諾を得た上で録音し、逐語的に起こしてデータとした。参加観察した内容はフィールドノートに記載し、データとした。

データ分析はデータ収集と並行して行われた。まず設定した研究テーマと照らし合わせながら重要と思われるデータに着目し、個々の現象の意味を解釈して概念化した。データあるいは概念の比較分析よりカテゴリーを見いだし、そのカテゴリーが持つ属性と、その属性が変化する範囲を検討した。またStrauss & Corbinが示すコーディングパラダイムに基づいてカテゴリー間の関係性を検討した。最終的に、在宅介護に関わる成員の苦痛や成員間の軋轢、家族の役割構造の変化を説明する、在宅介護プロセスの中核をなすカテゴリーとして在宅介護のしわ寄せによる〈家族内ニーズの競合〉が見いだされ、さらにその競合増大の条件と、競合増大を回避するために家族が用いる方略が明確化された。

5. 倫理的配慮

研究の目的、内容、およびプライバシー保護の方法等を書面にて説明した上で、高齢者およびその家族の代表者から同意を確認できたものを参加家族とした。継続的に家庭訪問を行ってデータ収集することから、家族の生活が乱されることのないように配慮するとともに、高齢者やその家族と信頼関係を形成できるよう関わり、不安感を与えることのないよう配慮した。

表1 研究参加家族の概要

ケース	高齢者				家族			
	年齢	性別	要介護度	必要な医療的管理	同居家族構成	家族介護者	サービス利用状況	競合の変化と在宅介護状況
A	72	女性	5	胃ろうから経管栄養、尿道カテーテル管理	本人、長女夫婦と孫1人の4人暮らし	長女	巡回訪問介護2/日、滞在型訪問介護1/日、巡回入浴1/週、訪問看護2/週、往診1/月→ショートステイ→長期療養施設へ	競合の増大→在宅介護が破綻
B	87	男性	3	なし	本人、長女夫婦と孫1人の4人暮らし	長女→長女・長男・次男	なし→往診2/月	競合増大するが、しわ寄せを耐える努力と家族役割分担の仕切り直しにより在宅介護を継続
C	86	女性	5	なし	本人、子ども3人(次女・長男・三女)の4人暮らし	次女・長男・三女	訪問看護1/週、往診1/月	競合の増大をしわ寄せを耐える努力により回避して在宅介護を継続
D	78	女性	5	なし	本人、夫の2人暮らし	夫・長女・次女・次男・次男の嫁	滞在型訪問介護2/週、訪問看護1/週→滞在型訪問介護3/週、訪問看護1/週、往診(不定期)	競合の増大をしわ寄せを耐える努力と家族役割分担の仕切り直しにより回避し、在宅介護を継続
E	69	女性	5	胃ろうから経管栄養、気管切開部からの喀痰吸引	本人、夫の2人暮らし	夫	訪問介護5/週、巡回入浴1/週、訪問看護2/週、往診(不定期)→長期療養施設へ	競合の増大→在宅介護が破綻

要介護高齢者家族の在宅介護プロセスに影響を及ぼす要因

表1の続き

ケース	高齢者				家族			
	年齢	性別	要介護度	必要な医療的管理	同居家族構成	家族介護者	サービス利用状況	競合の変化と在宅介護状況
F	60	女性	5	胃ろうからの経管栄養、喀痰吸引	本人、夫、子ども1人の3人暮らし	夫・長女	訪問介護2/週、巡回入浴1/月、訪問看護3/週、往診2/月→訪問介護5/週、訪問看護2/週、巡回入浴1/週、往診2/月	競合の増大を家族役割分担の仕切り直しにより解消、家族内の二子が調和した状態で在宅介護を継続
G	87	男性	申請中	なし	本人、妹2人の3人暮らし	同居の妹2人	訪問看護2/週、巡回入浴1/週	競合は増大しないまま在宅介護を実施
H	70	女性	2	なし	本人、夫の2人暮らし	夫	訪問介護5/週→訪問介護2/週	競合は増大しないまま在宅介護を実施
I	75	女性	4	なし	本人、夫の2人暮らし	夫	訪問介護3/週→訪問介護5/週	競合の増大をしわ寄せを耐える努力と家族役割分担の仕切り直しにより回避し、在宅介護を継続
J	69	男性	5	人工呼吸器の管理、気管切開部からの喀痰吸引	本人、夫、子ども2人の4人暮らし	妻	訪問介護5/週(AM, PM1日2回)、訪問看護5/週、往診1/週→訪問介護5/週(PMのみ)、訪問看護5/週、往診1/週	しわ寄せは大きいが、競合は増大しないまま在宅介護を実施
K	71	女性	申請せず	なし	本人、夫の2人暮らし	夫	なし	競合は増大しないまま在宅介護を実施
L	82	男性	申請中	胃ろうからの経管栄養、喀痰吸引	本人、妻、息子夫婦、孫2人の6人暮らし	長男・嫁・妻	訪問介護6/週、訪問看護3/週、巡回入浴1/週	競合の増大を家族役割分担の仕切り直しにより回避し、在宅介護を実施

III. 結果

図1に家族内ニーズの競合の増減とその条件、および家族が競合を回避するマネジメント方略の関係の概略を示す。〈家族内ニーズの競合〉の度合いは、〈しわ寄せ〉状況下にある成員の〔在宅介護する気持ち〕の強弱により左右された。〈しわ寄せ〉状

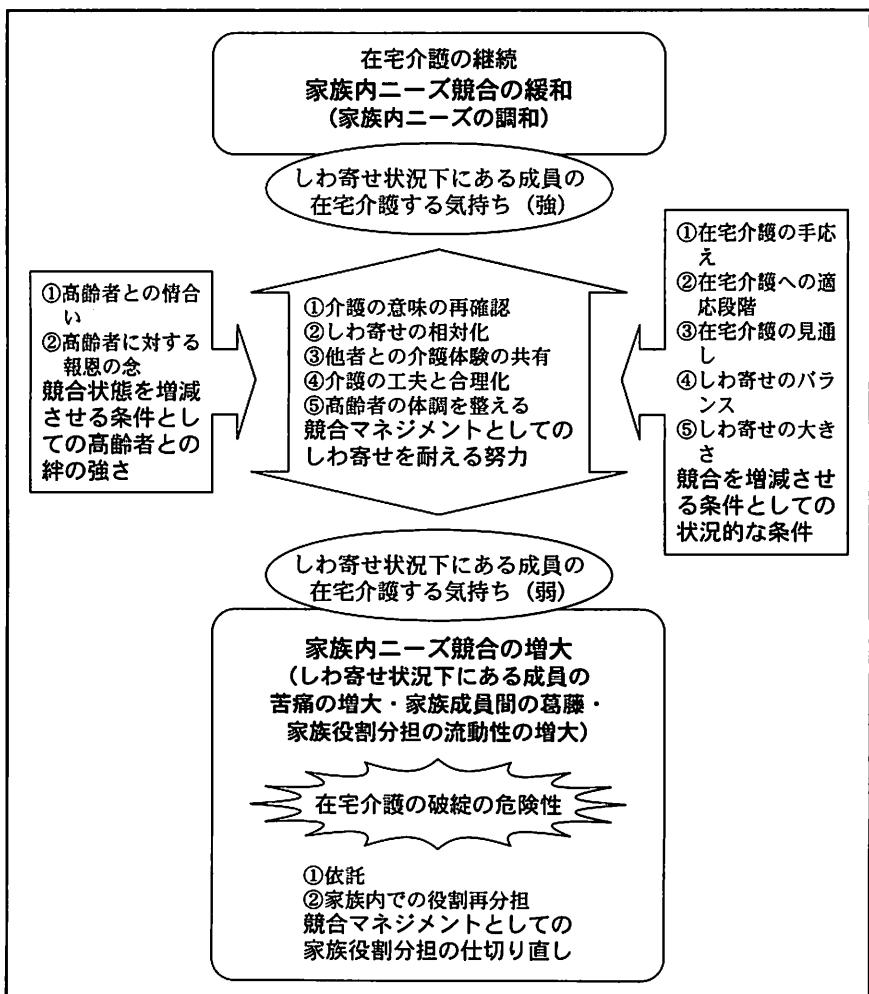


図1 家族内ニーズの競合を増減させる条件と家族の競合マネジメント

況に置かれた成員が、【在宅介護する気持ち】をある程度足並みそろえて維持し、それまで優位であったニーズを抑えている場合には、ニーズは調和に傾き、在宅介護は継続される傾向にあった。しかしどれかの成員の【在宅介護する気持ち】が維持されなくなった場合には、そこを震源地にニーズの競合は増大し、〈しわ寄せ〉状況下にある成員の苦痛の増大、成員間の葛藤を伴って、在宅介護の破綻へと傾いた。

〈しわ寄せ〉状況下にある成員の【在宅介護する気持ち】の強弱は、その成員に固的な【高齢者との絆の強さ】と、状況の変化に影響されて変化する【状況的な条件】により左右された。また、家族はニーズの競合が大きくない場合には《しわ寄せを耐える努力》，そして競合が増大した状況下においては《家族役割分担の仕切り直し》という競合マネジメント方略を用い、積極的にその増大を回避、解消した。

1. 〈家族内ニーズの競合〉増大の条件

A. 高齢者との絆の強さ

〈しわ寄せ〉状況下にある成員の【在宅介護する気持ち】は、その成員の【高齢者との絆の強さ】の程度によって異なった。【高齢者との絆の強さ】とは、高齢者とその成員との間に生じる、断ちがたい結びつきの度合いであった。続柄に関わらず、成員の【高齢者との絆の強さ】は長い年月の間に築かれた関係の質によって影響された。この【高齢者との絆の強さ】は、‘高齢者との情合い’および‘高齢者に対する報恩の念’に現れた。‘高齢者との情合い’とは、高齢者と気持ちが通じ合い、その気持ちが分かる、あるいは分かっていると感じられている状態であった。高齢者が言葉にしてその思いを伝えない、あるいは伝えられない場合にも、成員はそれまでにその高齢者との共有体験を通して自身の中に培われた高齢者の「その人らしさ」から、高齢者が現に置かれた境遇の中でどう思い、どうして欲しいと考えているかを推測した。この推測がより確からしさを持ち、高齢者の思いを分かっていると強く感じられる成員ほど、高齢者との間に断ちがたい結びつきを有し、在宅介護に没入する度合いも強いと考えられた（データ1）^{②)}。‘高齢者に対する報恩の念’とは、それまでに自分がその高齢者から受けた愛情、好意、思いやり、および実質的な援助に報いようとする思いであった。この思いの強い成員ほど、高齢者との結びつきは強く、【在宅介護する気持ち】は大きいと考えられた（データ2）。

注2) 以下、対応するデータは表2および表3に示す。

表2 家族内ニーズ競合の大きさを左右する諸条件に関する対応データ一覧

No.	諸条件	対応データと解釈
1	高齢者との 絆の強さ	「わたしは、親を見たいっていう、看れるっていうそういう確信があってね、確信じゃないんですけど、そういう…算段があるて、はいるんですけど。一略—（母親は意識障害のため会話できない状態であるが）まず母の気持ちには、うん…やっぱり、分かってる…って自分で思ってるのかもしれませんけどね。…自分の家に帰りたい、っていうのが…そういう気持ちでいますから、母は。」（家族A 長女／高齢者の気持ちを分かっているという確信→在宅介護する気持ち）
2	高齢者との 絆の強さ	「今までねえ、もう一切をやってくれておったからねえ。僕はもうちゃらんぽらんで全然。家内が一切ね、もう引き受けておったんですよ。やってくれてたのよね…だから、一生懸命ね、看病してあげたいと思って。」（家族D 夫／高齢者から受けた恩恵に報いたいという気持ち→在宅介護する気持ち）
3	在宅介護の 手応え	在宅介護をする気持ちを強化していた介護者の語り「顔色も良いし。…おじいさん、冬がやっぱり大変だよねーなんて言ってね。こここの胸の音が良くなりましたよ。うん。娘が聞くとあらよくなつたわねーって。一略— 前はあたしが勤めに行ってた頃はほんとに自分の好きなものしか、食べない人だったのね。あたしたちがおかげ作つたのをあげても絶対食べなかつたの。ほんとにもう納豆とお豆腐だけでした。うん。今はちゃんとみそ汁、ちゃんとすってくれるし、嫌いだつたねえ、絶対にもう、ちゃんと出されたもの、みんなちゃんと一応食べてくれるから。すごくそういうのがなかつた人だから、それもいい（笑）。」（家族B 長女／在宅介護による高齢者の体調改善、現状に即した生活習慣の変容確認→在宅介護する気持ちの強化）
4	在宅介護の 手応え	在宅介護していく気持ちを維持できなくなった介護者の語り「だんだん遠くなっていますからね、女房が…だんだんだんだんもう言うことが分からなくなつて。はい…（そう…話しかけて）もうこっち向かなくなりました。はい…（前はね）ちゃんと（呼べばこっち向いて）ええ、そうそうそうなんです。一略— 私の方がダメになっていきますよ。先がもうなんかこう、みえなくなつてきて。」（家族E 夫／高齢者のニーズを捉えられない、在宅介護していくもその高齢者のそれまでのその人らしさを確認できない→在宅介護する気持ちの維持困難）

注) No.は本文中のデータNo.と対応している。

表2の続き

No.	諸条件	対応データと解釈
5	在宅介護状況への適応段階	在宅介護する気持ちを維持することに困難を感じる介護者の語り「退院したばかりは、もうやるんだっていう、勢いがあったから一生懸命で。ただ、体の疲れだったんですね。その最初の頃。だんだん今は、その自分の自由ができないストレス。それがあるんですよね。」(家族B 長女／在宅介護に適応して行く時期を過ぎる→しわ寄せの認知→在宅介護する気持ちを維持することの困難)
6	在宅介護終結の見通し	「あの…これっていつまで続くかとか、すぐ、もう、そういうなんか発作みたいなことあると、やれることはみんなやって上げたいとか思うけど、これがどのくらい続くかとか分からぬ問題でしょー。そういうものもね。全力投球しちゃって、ばてちゃったりするかもしれないしねー。その辺が…難しいわねー。」(家族C 次女／高齢者の状態変化の予測と在宅介護の継続期間の予測がつかない→在宅介護する気持ちを強く保持していくことの困難感)
7	しわ寄せのバランス	「長男のお嫁さんっていうのが、もう大地主さんのお嬢さんで、本当におつとめもしなくて、おうちの中でピアノとかなんかそういうようなことして育った。ですから、とっても。父みたいな人を面倒見るっていうことは、たぶん疲れてしまうだろうと思って。一略ー 弟はほんと来ないんです。子どもたちがリトルリーグやってるんで、土日はもうそれで行ってしまうでしょ。それに忙しいから。でまた遠いからって言ってね、こられないんですよ。一略ー で、やっぱりあたしが女で、こういう仕事してたから(医療関係の仕事)、やっぱりしっかりするから、どうしても自分でやっちゃうっていう。」(家族B 長女／しわ寄せのバランスについての判断→自分のしわ寄せ状況の納得→在宅介護する気持ちの維持)
8	しわ寄せの大きさ	「だからああ、もう看ない方が良い。かなって、思うし。そのストレスっていうのは、もし自分が全くの健康だったらばね、いいんでしょうね、必ずやっぱりね、調子悪くなりますよ。…だから、そうなるとね、私だってまだ、あの子どもだけ大きい、ほんとに大きいわけじゃないから、わたし自分で、寝られない、っていうかためにできない。もうちょっとがんばらなきやって思うと、じゃあとりあえず親はおいといて、つて思っちゃいますよ。それは非情かもしれないけれど。自分の身を先に思っちゃうとありますよね。」(家族D 長女／成員の健康の脅かし・しわ寄せ拡大の可能性→在宅介護する気持ちの維持困難)

注) No.は本文中のデータNo.と対応している。

表3 競合マネジメント方略に関する対応データ一覧

No.	競合 マネジメント方略	対応データと解釈
9	介護の意味の再確認	「いつも原点に戻って。何もしないで逝かれちゃうよりも、少しでもねえ、関わって。あたしねえ、去年（母親が）倒れた時ねえ、旅行中だったの。だからそれに戻ってるわけ。そこでねえ、もしも…会えなかつたらもう、ほんと後悔した。このままだつたらあたしはどうしたらいいかしらと思ったけど。」（家族C 次女／親孝行できない無念さの体験→親孝行する最後のチャンスとしての在宅介護→介護の意味の再確認→在宅介護する気持ちを維持する）
10	しわ寄せの相対化	「どういう風になって、ねえ、あれするか、老いていくか分からぬけれども。これからの方がもっと大変なんじゃないかっていうように思って。ええ。まあ今はそんな大変っていうあれじゃない。」（家族B 長女／過去の大変な状況との比較→しわ寄せ状況の相対化）
11	他者との介護体験の共有	「経験しないと、こういうのって分かんないわねー。説明したって、分からぬし。だから分かり合える人、とは、こういう状態とかって話して。今ねえ、一番身近にいる人はねえ、…その人のお姉さんの、旦那さんが、やっぱりそういう脳卒中なんかで、そのお姉さんが面倒見て。それでホームヘルパーさん頼んで、っていうの結構長いんじゃないかなー。そしたらその友達がね、お姉さんの所に行って、手伝うんじゃなくって話を聞いてあげるっていう。もうそれだけでいいのよって言って。こうやっぱり、いろんなことを、誰彼でも言えるもんじゃないでしょ、だから妹が事情をよく知ってるから。お姉さんはそれで憂き晴らししてるらしい。あたしは、その人と、いろんなこう…思ったこと電話で、長電話で話したりとか、（笑）します。すごいよく分かってくれるの。」（家族C 次女／他者との介護体験の共有→在宅介護する気持ちの維持）
12	介護の工夫と合理化	「あのレトルトとったから（在宅介護用のレトルト食品をファックスで注文），ちょっとだけ楽になったかなって。えっと…わたし今週月曜日に来て、今日だけだいたい2日分くらいの。」（家族D 長女／レトルト食品代用による介護の工夫と合理化→しわ寄せの軽減→在宅介護する気持ちの維持）

注) No.は本文中のデータNo.と対応している。

表3の続き

No.	競合マネジメント方略	対応データと解釈
13	高齢者の体調を整える	「それあの…(外来診察を)すごく待って、それで帰ると具合が悪くなるんですよ。風邪引くんです。ああ、これじゃいけないなーと思って、やっぱりかかりつけを探さないとと思ってね。で、今度その先生にね、報告書を書いていただいて、外来の先生に。近所でちょっとね、診てもらうようにしますからって言って。」(家族B 長女／外来受診→体調悪化の引き金→体調を維持するためにかかりつけ医を持つ)
14	依託	Cさんの在宅介護を巡って介護に当たる長女とその夫の間で静いが度重なる状態となった。それを機にヘルパーから勧められても利用に踏み切れなかったショートステイを利用に踏み切った。「結構いろいろ教わって、ショートステイなんかも全然分かんなかつたんだけど、聞いて。それで前から、去年から言われたんだけど、なかなか、行動に…福祉の方行って、聞いて。その方がいいわよーなんて言われて。うん、やっと(笑)。去年の暮れに動いて。ショートステイも私が休めるからって言ってるんだけど、実は(夫)本人がすごく楽しみにしてるんですよね。」(家族A 長女／競合増大→介護役割の依託によるしわ寄せ解消)
15	依託(その条件)	「(以前は)自分の自由の行動ができましたからね。今はもう行動範囲が、明後日もまあ集まりがあってどうしても行かないといけないんですけども、夜なもんですからね。うん…どうしようかなーと…行かなきゃならないんですけども、いない時に誰が痰をとってくれるかなという感じがあるんです。(ヘルパーは)とれないんですね。それでこないだはね、看護婦さんに頼んだんですよ。そうすると介護保険外ですからね、1時間で12,000円くらいですって。厳しいですねー。一略ーだからなかなかねえ、自由が利きませんでね。そういうのがだんだんこう、閉塞感っていうんですか。そういう感じですね。」(家族E 夫／しわ寄せ解消のために必要なサービスの不在)
16	依託(その条件)	介護を任せて外出できる介護者の語り「一生懸命やって下さってるんで 一略ー 来るとすぐもうね、タオルここにあるバスタオルここにある、着替えはここにあるって分かってますからね。(笑) 無駄なくやってくださいしね。ちゃんとね、これはここにあります、タオルはここです、洗面器はここですっていうのはもうしなくてもいいしね。」(家族F 夫／一生懸命さ、家族文化の習熟とそれを踏まえた専門技術→任せきれるだけの信頼感)

注) No.は本文中のデータNo.と対応している。

表3の続き

No.	競合マネジメント方略	対応データと解釈
17	家族内での役割再分担	Cさんを介護する長女とその夫の間でそれぞれのニーズの充足を競って対立が激化したことをきっかけに、夫がより収入の多い仕事に転職した。この転職により、長女は仕事を辞めて夫に経済的な資源を確保するという役割を任せた。 「どっかで何かを、だからあたしそうやって自分のじゃあもうこの状態が続くなら、仕事、うん、やめようかなーって。ずっと思ってて、それでまあ主人に、もうほんとにきついきついってずーっと言ってて、で旅行いった時、ほら具合が悪くなっちゃって 一略— そしたら次の日かな? 自分で仕事、なんかおれが考えるからーなんて言って。電話して、なんか自分で探してきたみたいで。」(家族A 長女／競合増大→成員内での役割分担の組み替え)
18	家族内での役割再分担	自分の介護をそれまで通りすべて娘にやってもらいたいと望むDさんと、少し父親の介護から離れて友達と旅行に行きたいという長女の間での対立をきっかけに、Dさんの介護の一部をこれまで直接関わってこなかった弟達が分担していくようになった。「あたし、やっぱりたまにはいいかなって思って(笑)。少し弟達も、慣れると思うから。そしてだんだんとね、そうやってできるようになつたらね…こうやってそういう風にして慣らしていくかなと思って。それもいいかなって思って。」(家族B 長女／競合増大→成員を増やしての役割分担の組み替え)
19	家族内での役割再分担（その条件）	「せがれの方が近いんですけどね。職業が忙しくてとても。嫁さんも保険会社の、年齢からいってもまあ、一定の地位にいて。息子はまあ課長だからね、とても。…働き盛りなんですね、で、またね、わたしに言わせると会社人間で。会社一日も休まないんですよ。一略—(息子さんたちは共働きされてるからなかなか頼むっていうことは難しい)ええ、難しいですね。それと丁度孫も来年、高校ですから、そういうこともあって大変だと思ってるんですよね。」(家族E 夫／子どもや孫へのしわ寄せ拡大の可能性→家族内での役割再分担困難)

注) No.は本文中のデータNo.と対応している。

〈しわ寄せ〉状況下にある成員の高齢者との絆が強い場合には、[在宅介護する気持ち]はそれを引き下げるような状況の変化に影響を受けにくく、維持される傾向があった。反対に〈しわ寄せ〉状況下にある成員の高齢者との絆が弱い場合には、そのような状況変化に影響を受けて介護を優先させていくことは困難となりやすかった。また高齢者との絆の強い成員の[在宅介護する気持ち]は、それを引き上げるような状況変化の下で強化され、一方高齢者との絆が弱い成員では、そのような状況変化が生じても、在宅介護する気持ちを維持していくことが困難となった。

B. 状況的な条件

(1) 在宅介護の手応え

家族が行う在宅介護は、高齢者の〈その人らしさ〉を取り戻し、維持し、発展させることに向かう働きかけであると考えられた。〈しわ寄せ〉状況下に置かれた成員の[在宅介護する気持ち]は、その働きかけが機能しているかを確認できるかという‘在宅介護の手応え’によって判断された。家族の働きかけは、要介護状態となった高齢者その人のニーズをキャッチすること、安全を確保し生命を維持していくための援助を通してその人の存在を繋げること、そして高齢者が長い人生の中で培ってきた固有の生活様式の連続性を保ちつつ現在の状況に合わせて変化させることに焦点化された。在宅介護の手応えは、それらの働きかけに呼応した反応が確認できるかどうかに依存した。在宅介護の手応えを確認できる成員は〈しわ寄せ〉状況に置かれながらも在宅介護に没頭したが（データ3），そうでない場合には在宅介護していくという気持ちは弱まり、競合は増大した（データ4）。

(2) 在宅介護状況への適応段階

在宅介護が始まってしばらくは、高齢者自身も他の成員も、その高齢者に生じた変化を受容するとともに、要介護状態となった高齢者が在宅療養していくために必要な細かなコツまで習得し、新しい在宅介護という状況に適応していくことが最も優先すべき課題となった。そのため成員は、自分が置かれた〈しわ寄せ〉状況に注意が向かない傾向があった。一方、この適応段階を過ぎ、在宅介護が軌道に乗ると、成員は自身の〈しわ寄せ〉状況への自覚を深め、〈しわ寄せ〉状況を回復させようとする欲求を高めた。そのため高齢者の在宅介護する気持ちをそれまで通り維持することが困難となった（データ5）。

(3) 在宅介護終結の見通し

‘在宅介護終結の見通し’とは、高齢者の状態がこの先どのように変化し、在宅介

護がこの先いつまで続くのかという予測である。病状が固定化し在宅療養に移行した要介護高齢者は、身体機能の回復が見込めない場合も多く、また長期療養施設への入所が予定されていない、あるいは待機者多數のため希望していても具体的な入所予定の立たない場合が多かった。そのため多くの場合‘在宅介護道終結の見通し’は高齢者の死がどれだけ差し迫った出来事であるかどうかで推測された。高齢者に生命に関わるような病状の急変や悪化が起こり、高齢者の死がより現実味を帯びた時、〈しわ寄せ〉状況下に置かれた成員は、在宅介護をこれまで受けた恩恵に報いるために与えられた最後のチャンスとして、〈しわ寄せ〉状況を限定化して意味づけた。このように意味づけをする成員は、〈しわ寄せ〉状況に置かれていても、自分のニーズを我慢して高齢者の介護に没入した。一方、高齢者の病状に変動がなく、在宅介護終結の見通しがつかない状況では、成員は在宅介護する気持ちを強く保持することが困難となつた（データ6）。

（4）しわ寄せのバランス

成員は自身の〈しわ寄せ〉状況と他の成員の〈しわ寄せ〉状況とのバランスを比較検討し、自分に生じている〈しわ寄せ〉状況が納得できるものであるかどうか判断した。その際には、各成員の年齢、仕事の有無とその重要性や忙しさ、健康状態、子どもの有無とその子育てに手の掛かる程度、高齢者からそれまで受けてきた情緒的、実質的援助の量、長男であるとか長女である等の高齢者との統柄、高齢者の住居からの物理的距離、それぞれが持ち合せた能力や高齢者との相性等が総合的に考慮された。自身に生じた〈しわ寄せ〉状況を相応だと納得できる場合には、その成員は在宅介護する気持ちを維持することが容易であった。一方自分の〈しわ寄せ〉状況が他の成員との比較の上で納得できない場合には、その成員は在宅介護する気持ちを維持することが困難となつた（データ7）。

（5）しわ寄せの大きさ

‘しわ寄せの大きさ’は、各成員のニーズ抑圧の程度と、ニーズ抑圧状況の成員への広がりの範囲を表す概念であった。〈しわ寄せ〉状況下にある成員自身のニーズ抑圧の程度が小さい場合には、介護を優先することができる傾向にあった。しかし〈しわ寄せ〉が増大し、成員の身体的な健康を脅かすほどに大きく、またその成員と相互作用する成員のニーズ充足を脅かすほどに拡大した場合には、その成員は在宅介護する気持ちを保持することが困難となつた（データ8）。

以上、〈しわ寄せ〉状況下にある成員の〔在宅介護する気持ち〕の強弱は、【高齢者

との絆の強さ】および、状況的な諸条件の重なり合いのバランスによって左右された。例えば高齢者との絆の強い成員は、自身の〈しわ寄せ〉が大きい場合でも、「在宅介護の手応え」が得られていると、在宅介護する気持ちを保持していた。

2. 競合マネジメント

A. しわ寄せを耐える努力

競合のそれほど増大していない段階では、〈しわ寄せ〉状況下に置かれた成員は個人単位で競合を回避する傾向があり、その際用いられる方略は《しわ寄せを耐える努力》と概念化された。成員の《しわ寄せを耐える努力》には以下のような5つの方略が見いだされた。

(1) 介護の意味の再確認

成員は在宅介護を、高齢者との過去を省みて、こうすれば良かった、ああすれば良かったと思えることを、穴埋めする最後の手段と意味づけるものが多くた。例えば在宅介護の手応えを見いだすことができず、その終結を見通せない状況で、成員は在宅介護をする意味を再確認した。この在宅介護する意味の再確認により、成員は在宅介護する気持ちを取り戻し、〈競合〉の増大を防いだ（データ9）。

(2) しわ寄せの相対化

〈しわ寄せ〉を状況下にある成員は、今自分が置かれている〈しわ寄せ〉状況を、それ以上に大変な状況と比較することにより、在宅介護する気持ちを維持した。これから訪れると思われる未来のより大変な状況や過去のより大変な状況、他者が遭遇している大変な状況が比較の対象となった。これらの状況との比較を通して、現在〈しわ寄せ〉状況に置かれた自分の大変さを小さく捉え直すことにより、現在の〈しわ寄せ〉状況を耐え、競合の増大を回避した（データ10）。

(3) 他者との介護体験の共有

自分と類似の在宅介護の体験を持ち、互いの状況を理解し合える他者と体験を共有することは、成員が【在宅介護する気持ち】を維持する上で効果を持った（データ11）。

(4) 介護の工夫と合理化

成員は介護用品を使うなどして介護方法に様々な工夫を凝らして合理化を図り、家族の役割分担を変更しないまま活動や休息、相互作用制限を軽減した。〈しわ寄せ〉状況に置かれた成員は、この介護の工夫と合理化により在宅介護する気持ちを維持する場合もあった（データ12）。

(5) 高齢者の体調を整える

成員にとり高齢者の体調を良好に整えることは、一義的には高齢者の生命を守り、高齢者その人の〈その人らしさ〉を繋いでいくという意味をもつた。しかしこれは一方で、在宅介護の〈しわ寄せ〉増大を防ぐ方略としても意味づけられた。下痢をしたり発熱したりするなど高齢者の体調が悪化した場合には、成員はそれに対処するためにさらに多大の時間と労力を必要とされた。そのため、すでに〈しわ寄せ〉状況下にある成員は、高齢者の体調の維持、改善に向け様々な手段を講じ、〈しわ寄せ〉を我慢の限界に押しとどめようと努力した（データ13）。

B. 家族役割分担の仕切り直し

家族内のニーズの競合が増大し、もはや《しわ寄せを耐える努力》は効力を失った段階で、家族はどの活動や相互作用をどれだけ成員で担うか、その担うべき活動や相互作用を成員間でどのように割り振るかという、家族全体としての役割分担を見直し、仕切り直すことにより、成員の従来のニーズが抑圧された〈しわ寄せ〉状況の打開に向かい、一気に家族内ニーズ競合の鎮静化を図った。このような家族全体の役割構造を変化させる競合マネジメントは、《家族役割分担の仕切り直し》と概念化され、「依託」と‘家族内での役割再分担’が含まれた。

(1) 依託

依託とは、在宅介護を継続しつつも、それまでは家族内で分担してきた一部特定の役割を、みずから家族外のサポートシステムに任せ切り〈しわ寄せ〉を解消しようとする手段であった。外部から働きかけられ、勧められるままに外部システムからのサポートサービスを利用する状況にあっても、家族がそれらに役割を任せ切れない場合には、サービス利用はニーズの競合を統制する方略としては機能しなかった。この依託の対象となる主な役割は、高齢者の生活行動援助であったが、それ以外の役割、例えば子育て役割を外部システムに依託して、〈しわ寄せ〉解消を図る場合もあった（データ14）。「依託」という方略がとられるためには、第一にしわ寄せを解消することに適合した外部サービスが存在すること（データ15）、そして依託するサービスへの信頼感を認識できることが必要だった。外部サービスへ家族がどの程度信頼感を持てるかは、外部サービス提供者個人の一生懸命さや、高齢者への温かい気持ち、家族文化の習熟とそれを踏まえた専門技術、経験に裏打ちされた応用力などを確認できるか否かで判断された（データ16）。

(2) 家族内での役割再分担

‘家族内での役割再分担’とは、家族成員間でそれまでの役割分担を振り分けし直し〈しわ寄せ〉を解消することにより競合増大を回避する手段であった。家族内での役割の再分担は、高齢者の在宅介護から常態的に影響を受けている成員内で、介護、家事、子育て等様々な役割を割り振りし直すことにより達成された（データ17）。また、この家族内での役割再分担は、常態的にはその高齢者の在宅介護に関わっていない血縁者を新たに在宅介護の分担者に加えるという形で行われる場合もあった（データ18）。このためには、その家族の役割を分担するだけの成員数があること、在宅介護以前の成員間の関係性が良好であることが必要であった。また、新しく役割分担する成員を超えて〈しわ寄せ〉が拡大しないこと（例えば介護を分担しない娘の夫や子どもへのしわ寄せが波及しないこと）も重要で、拡大すると判断された場合には、‘家族内での役割再分担’という方法はとられにくかった（データ19）。

IV. 考察

1. 家族内ニーズの競合の解消に向かう家族の内発的な力を支える援助

家族内ニーズの競合調整に向けての家族支援には、どのようなことが望まれようか。本研究では、家族は在宅介護する中で一方的に状況の変化に流されて家族内のニーズの競合を増大させ、その状況に甘んじるのでなく、競合マネジメント方略を用いて積極的にニーズの競合を回避し、厳しい困難状況さえ打開して行く内発的な力を有することが明らかとなった。ただしその力は一人の選ばれた介護者の努力では不十分であり、《しわ寄せを耐える努力》に見られる個々の成員の努力と、家族体制を一新する《家族役割分担の仕切り直し》という成員の共同作業により發揮されることが明確化された。特に在宅介護によって生じる困難状況を、最終的には内発的に全体的な役割体制を変革させて打開しようとする力を家族が有することは、システムが環境変化から生じる混沌を契機とし、より適応的な高次の体制を「自己組織化」すると説明するシステム論¹⁴⁾からも支持されよう。従って、第一に競合調整に向けての支援には、よりいっそう一つのシステムとして家族を捉える視点を持ち、成員間のニーズの競合を統制しようとする家族の内発的な力を認めるとともに、それを活性化していく姿勢の重要性が推察される。

また本研究において家族の競合マネジメント方略は、競合の大きさにより使い分け

られることが明らかにされた。Given & Given¹⁵⁾ は介護軌跡の中で、高齢者や家族が特定の支援を必要とするようになる時期，“crucial transition time” が存在し、それに対応するダイナミックな支援が必要であると述べている。家族が在宅介護を継続していくうとする内発力を活性化していくためには、家族がその時々で使い分ける方略に応じた援助が必要であると考えられる。すなわちニーズの競合が大きくなる段階では、成員が介護の意味の再確認をすること、〈しわ寄せ〉を相対化すること、他者と介護体験を共有することによって、内省的に気持ちをコントロールできるよう、相談役となったり、ピアグループの組織化を支援したりすることも有効であろう。また家族の‘介護の工夫と合理化’‘高齢者の体調を整える’という環境に働きかけて気持ちをコントロールする方略を促し支えるために、専門的な知識を提供していくことが有効となろう。一方競合が著しく増大した段階では《家族役割分担の仕切り直し》が促進されるよう、サービス提供体制を整え、積極的に家族に提案していくことが優先して望まれよう。次項で検討するような競合を増大させる諸条件は、このような支援提供のタイミングを見極めるための参考となろう。

2. 成員の【在宅介護する気持ち】を左右し、家族内ニーズの競合に影響する諸条件

従来介護者は、長時間の介護¹⁶⁾ による自由時間の制限⁸⁾ や社会的活動制限^{17)~19)}、そして自身の健康状態悪化³⁾ により、介護負担感や抑鬱度を高めると報告されてきた。これらは〈しわ寄せ〉状況が大きいほど、すなわち在宅介護の要請に伴う活動・相互作用制限により、成員の従来のニーズが満たされなくなるほど、在宅介護する気持ちちは維持されにくく、競合が増大するという本研究の結果と一致する。加えて本研究では、従来のニーズが満たされなくなり苦痛が生じる現象は、介護者と相互作用する成員にも生じることが明るみとなった。援助のタイミングをつかむ上で、介護者はもちろん、その他の成員の〈しわ寄せ〉とその大きさ、そしてそれに対する反応にまで広げて把握していくことが肝要と考えられる。一方本研究では以下で見るように、競合増大が〈しわ寄せ〉の大きさだけでは予測できないことも確認された。

Phillips & Rempusheski²⁰⁾ は、介護者と高齢者との過去の関係性が、その介護者の現在の介護役割遂行に対する信念の強さが影響していると報告した。本研究では介護者と高齢者との過去の関係性により培われた【高齢者との絆の強さ】が、成員の【在宅介護する気持ち】を左右する条件として挙げられた。これは山本^{5)~7)} の、介護者

の被介護者に対する「愛着」（介護者が被介護者に対して持つ情緒的なつながり）が、在宅介護を継続する動機となるという報告と一致する。ところで高齢者と取り結んできた過去の関係性は成員毎に異なるため、【高齢者との絆の強さ】も成員により異なり、ひいては【在宅介護する気持ち】もばらついた。そして【在宅介護する気持ち】を維持できなくなった成員を起点として、家族内のニーズの競合は増大した。本研究で得られたこれらの結果は、援助専門職が競合増大の可能性を予見するために、〈しわ寄せ〉状況下に置かれた成員それぞれの高齢者との関係性を過去に遡って把握する必要性を示唆している。

本研究において家族の在宅介護とは、高齢者の〈その人らしさ〉を繋ぐことに向かう働きかけとして明確化された。その働きかけへの手応えを高齢者から確認できるか否かが、成員の在宅介護する気持ちを大きく左右する条件として挙げられた。象徴的相互作用論によれば、「自己」は他者との関係性により構築され、その連続性が維持されると説明される^{21) 22)}。高齢者の〈その人らしさ〉を維持する努力は、高齢者とのそれまでの関係性を維持しようとする努力でもあり、ひいては成員のアイデンティティを維持する上でも重要な意味をもつと考えられる。在宅介護の援助に当たる専門職者は、家族がその手応えを得られているかに着目し、競合増大の可能性を見極める必要性が示唆される。また、高齢者の〈その人らしさ〉を成員と共有し、要介護高齢者が固有の存在のあり方を維持し続けていることを確認できるよう、働きかけの方法を共に考え、試みて行く必要があろう。

在宅介護に移行してまもない時期、介護者は予期しなかった出来事に遭遇することによるとまどい、家族役割との調整などの困難に遭遇している²³⁾。本研究では、この時期成員はまずこれら諸問題に対処し介護状況に適応していくことに集中し、自分達が陥っている〈しわ寄せ〉状況に注意が向かない傾向があり、そのため【在宅介護する気持ち】は維持されてニーズの競合増大は防がれることが明らかになった。「在宅介護状況への適応段階」という条件によって【在宅介護する気持ち】が維持されるのは一時期であり、それを考慮して競合増大を見極めることも必要であろう。

また【在宅介護する気持ち】を左右する条件として、「在宅介護終結の見通し」が挙げられた。在宅介護がいつまで続くのか見通せないような状況にある場合には、成員の苦痛や、成員間のニーズの〈競合の大きさ〉が増大している場合のあることを意識して、小さなことでも達成可能な目標を持てるよう援助するとともに、場合によっては競合増大を予測してサービス利用のための調整的役割に転じることも必要と考えられる。

本研究では〈しわ寄せ〉のバランスが成員の〔在宅介護する気持ち〕を左右して、競合増大を方向づける要因として挙げられた。すなわち成員は家族全体に生じている〈しわ寄せ〉状況を俯瞰する視点を持ち、その中の自分の位置づけを評価しており、それが〔在宅介護する気持ち〕を左右することを明らかにした。この結果は、援助者が家族全体を捉える視点を持ち、成員それぞれの生活状況を把握する重要性をいつそう強調するものと考える。

VI. 本研究の限界と課題

本研究では特定の成員を中心にデータを得たため、家族全体の現象を捉え切れていない可能性を残しており、本研究の限界となっている。また都市部から参加家族が選ばれており、伝統的な家族規範の強く残る地方において本研究の結果が当てはまらない可能性もある。さらなる継続調査が必要である。また命名した用語の妥当性についても検討し洗練させていく必要がある。

謝辞

研究にご協力いただいたご家族の皆様、関係施設のスタッフの方々、ご指導いただいた日本赤十字看護大学の黒田裕子教授、立教大学の木下康仁教授に心よりお礼申し上げます。本論は公益信託山路ふみ子専門看護教育研究助成基金の助成を受け、日本赤十字看護大学に提出した博士論文の一部に加筆修正を加えたものである。

引用文献

- 1) 北素子：要介護高齢者家族の在宅介護プロセス：在宅介護のしわ寄せによる家族内ニーズの競合プロセス，日本看護科学会誌，22（4），33-43，2002
- 2) Majerovitz, S. D. : Role of family adaptability in the psychological adjustment of spouse caregivers to patients with dementia. Psychology and Aging, 10 (3), 447-457, 1995
- 3) 上田照子，橋本美知子，高橋祐夫，後藤博文，来嶋安子，大塩まゆみ，水無瀬文子，青木信雄，中園直樹：在宅要介護老人を介護する高齢者の負担に関する研究，日本公衆衛生雑誌，41（6），499-505，1994
- 4) 佐藤敏子：在宅において夫を介護する妻のWell-beingに関する研究，日本在宅ケア学会誌，4（1），72-78，2000
- 5) 山本則子：痴呆性老人の家族介護に関する研究：娘および嫁介護者の人生における介護経験の意味：2. 値値と困難のパラドックス，看護研究，28（4），67-87，1995 a
- 6) 山本則子：痴呆性老人の家族介護に関する研究：娘および嫁介護者の人生における介護経験の意味：3. 介護量引き下げの意志決定過程，看護研究，28（5），73-91，1995 b
- 7) 山本則子：痴呆性老人の家族介護に関する研究：娘および嫁介護者の人生における介護経験の意味：4. 介護しなければならない現実と折り合う・介護の軌跡・結論，看護研究，28（6），51-70，1995 c
- 8) 横田良子，榎本香織，下村裕子：在宅要介護高齢者介護継続に関する研究，慶應義塾大学看護短期大学紀要，8：77-87，1998
- 9) 菊池和則，冷水豊，中野いく子，中谷陽明，和氣純子，坂田周一，平岡公一，出雲祐二，馬場純子，深谷太郎：在宅要介護高齢者に対する家族（在宅）介護の質の評価とその関連要因，老年社会科学，18（1），50-62，1996
- 10) Fink, S. V. : The influence of family resources and family demands on the strains and well-being of caregiving families. Nursing Research, 44 (3), 139-146, 1995
- 11) 今井裕美，飯田澄美子，松下和子，村嶋幸代，藤村真弓，佐貫淳子，花沢和枝，日野原重明：在宅介護老人をとりまく介護者・家族関係に関する研究，聖路加看護大学紀要，14（3），54-65，1988

- 12) Strauss, A. L. & Corbin, J. : *Basics of qualitative research : grounded theory procedures and techniques*. Newbury Park, CA : Sage, 1990
- 13) 木下康人：グラウンデッド・セオリー・アプローチ：質的実証研究の再生，弘文堂，東京，1999
- 14) Prigogine, I. & Stengers, I. (1984)／伏見康次・伏見謙・松枝秀明訳：混沌からの秩序，みすず書房，東京，1987
- 15) Given, B. A., & Given, C. W. : *Family caregiving for elderly*. Annual Review of Nursing Research, 10, 77-101, 1992
- 16) 神田清子，太田紀久子，清水裕子，瀬戸正子：在宅介護老人の介護者の抑うつ度と負担度の関連に関する研究，日本看護学会誌，3（1），28-37，1994
- 17) 後藤裕一郎，鈴木庄亮：脳血管障害患者の介護者における鬱状態について，日本公衆衛生雑誌，41（9），945-945，1993
- 18) 杉原陽子，杉澤秀博，中谷陽明，柴田博：在宅介護老人の主介護者のストレスに対する介護期間の影響，日本公衆衛生雑誌，45（4），320-335，1998
- 19) 関戸好子，領塚規恵：在宅ケアにかかわる家族介護者の社会活動状況：身体的・精神的健康との関連において，慶應義塾看護短期大学紀要，8：61-68，1998
- 20) Phillips, L. R. & Rempusheski, V. F. : *Caring for the frail elderly at home : toward a theoretical explanation of the dynamics of poor quality family caregiving*. Advances in Nursing Science, 8 (4), 62-84, 1986
- 21) Blumer, H. (1969)／後藤将之訳：シンボリック相互作用論：パースペクティブと方法，劉草社，東京，1991
- 22) 片桐雅隆：プライバシーの社会学：相互行為・自己・プライバシー，世界思想社，京都，1996
- 23) 佐藤敏子：在宅片麻痺患者および主介護者のストレス・対処行動について，帝京平成短期大学紀要，5（3），19-25，1995